# The Teaching Methods of Vocal Skill at the Teachers College


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2018-01-31<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En): Keywords: vocal music (voice), teaching method, teacher’s license<br>作成者: HATTORI, Anri, UNO, Noriko, TOYOSHIMA, Kumiko<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4263 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 教員および保育士養成学部における声楽実技の指導法

児童学部　非常勤講師　服部安里
児童学部　ＴＡ　宇野雅子
児童学部　児童学科　豊島久美子

要旨：小学校教諭、幼稚園教諭および保育士養成の学部において、声楽実技は必修科目となっている。しかしながら、受講者の多くは、歌唱や器楽などの音楽の専門的な指導を受けた経験がなく、読譜をはじめとする音楽の基礎的知識を持ち合わせていないのが現状である。本論文では、声楽初心者の学生を対象とした実技科目において、学生が苦手意識を抱くことなく技術を身につけるためには、どのような指導内容が有効かを検証した。さらに、教育及び保育の現場で子どもたちの音楽活動を指導する際に考慮すべき点を明らかにし、指導者として求められる能力についても分析した。教員免許及び保育士資格取得のための講義科目には、学生の能力に応じた指導が求められている。加えて、学生に継続的な音楽の指導を提供するためには、音楽関連科目間の連携が不可欠である。本研究は、免許取得を目指す学生に、より実践的な音楽の技術と応用力を提供するための課題を明らかにする。

キーワード：声楽、指導法、教員免許

## 1. はじめに

小学校教諭、幼稚園教諭および保育士養成を目的とする学部の多くは、声楽実技を必修科目として設置している。また、教育・保育現場における音楽活動の重要性は申すまでもなく、現場では音楽が盛んに用いられている[1]。さらに近年の研究から、音楽活動が子どもの心身に良い影響を与えることが明らかとなってきており、子どもの音楽教育に対する関心も多く寄せられている[2,3]。一方で、保育者の全般的な質の低下が危惧されており[4]、十分な音楽能力を持たないまま現場に出てしまう教員や保育士（指導者）も少なくない。学校や園における音楽の質は重要であるにもかかわらず、指導者の大半が音楽の専門家ではないのである[1]。それどころか、教員および保育士養成大学（以後、「養成大学」とする）では、読譜にも不自由するような音楽経験の少ない学生も多く、限られた講義時間数の中で教育および保育の現場に対応できる能力をいかに育成するかということが重要な課題である。

そこで、本稿では養成大学における音楽活動、中でも声楽実技（歌唱）に焦点をあて、将来、教員や保育士を目指す学生にとって、より実践的な音楽の技術と応用力を提供するための課題を明らかにし、これからの養成大学のあり方を考察する。

## 2. 小学校教諭、幼稚園教諭および保育士養成学部における声楽実技について

### 2.1. 各免許状および資格における声楽実技の位置づけ

小学校、幼稚園教諭および保育士養成の学部（以後、「養成学部」とする）における声楽実技の内容は、各省の定める科目に沿って設定されている。それぞれの免許状および資格については、小学校教諭および幼稚園教諭は文部科学省が、保育士資格は厚生労働省が管轄しており、その取得条件（特別免許状や臨時免許状等の特例を除く）は下記のように各免許状および資格により異なっている。

#### 2.1.1. 小学校および幼稚園教諭

小学校および幼稚園教諭になるためには教職課程のある大学や短期大学等に入学し、法令で定められた科目及び単位を修得して卒業した後、各都道府県教育委員会に教員免許状の授与申請を行わなくてはならない[5]。

教育職員の免許に関する基準を定めた「教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則」によると、小学校教諭の免許状を取得するには、各学位を有する他、二種免許状の場合は「教科に関する科目」4 単位、「教職に関する科目」31 単位、「教科又は教職に関する科目」2 単位を、一種免許状の場合、「教科に関する科目」8 単位、「教職に関する科目」41 単位、

「教科又は教職に関する科目」10 単位を、専修免許状の場合、「教科に関する科目」8 単位、「教職に関する科目」41 単位、「教科又は教職に関する科目」34 単位取得することが定められている[6]。

幼稚園教諭の免許状を取得するには、各学位を有する他、二種免許状の場合は「教科に関する科目」4 単位、「教職に関する科目」27 単位を、一種免許状の場合、「教科に関する科目」6 単位、「教職に関する科目」35 単位、「教科又は教職に関する科目」10 単位を、専修免許状の場合、「教科に関する科目」6 単位、「教職に関する科目」35 単位、「教科又は教職に関する科目」34 単位取得することが定められている[6]。

このうち声楽実技に関する講義は、「教科に関する科目」に該当する。「教科に関する科目」は、国語(書写を含む)、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭及び体育(これら科目に含まれる内容を合わせた内容に係る科目その他これら科目に順ずる内容の科目を含む。) である。修得方法はこれらのうち、一以上の科目について修得するものとされており、二種免許状で最低 4 単位、一種及び専修免許状では幼稚園教諭免許状では最低 6 単位、小学校教諭免許状では最低 8 単位を取得すれば良いことになっている[6]。

2.1.2. 保育士資格

保育士になるためには、都道府県知事の指定する保育士を養成する学校その他の施設で所定の課程・科目を履修し卒業するか、保育士試験に合格し、保育士資格を取得した後、保育士登録を受け、保育士証の交付を受けなくてはならない[7]。保育士養成大学に関連する取得方法は前者である。この場合、保育士資格の取得基準を定めた「児童福祉法施行規則第 6 条の 2 第 1 項第 3 号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法」によると、「必修科目」にある全ての教科目について、および「選択必修科目」から 18 単位以上、「教養科目」から 10 単位以上を取得することが定められている[8]。

このうち声楽実技に関する科目は「必修科目」である「保育の表現技術」が該当する。「保育の表現技術」では身体表現、音楽表現、造形表現、言語表現等の表現活動に関する内容で構成されており、音楽に関しては下記の内容が挙げられている[9]。

(1)子どもの発達と音楽表現に関する知識と技術

(2)身近な自然やものの音や音色、人の声や音楽等に親しむ経験と保育の環境

(3)子どもの経験や様々な表現活動と音楽表現とを結びつける遊びの展開

したがって養成過程において、小学校および幼稚園教諭に関しては、全教科の単位を取得しなくても免許を取得することが可能となる。声楽実技に限らず、音楽に関する科目全般を受けなくとも制度上は免許状を取得し、現場に出ることができてしまう。保育士資格に関しては、音楽表現に関する単位が 4 単位分必修とされているが、その中に声楽が指定されているわけではない。

こうした現状の中で多くの養成大学において、声楽実技を開講していることは有意義であろう。 しかしながら、シラバスを見るとその内容の多くは技術的な内容に偏っており、現場での実践力に繋がっているのか疑問を持たざるを得ない。限られた授業時間数の中で、学生たちが卒業後、現場で通用する力をつけるためには、今一度カリキュラムを見直す必要があると考える。

2.2. 小学校、幼稚園および保育園(所)における現状

次項において新たなカリキュラムのあり方を考察するにあたり、現場の現状や課題を調べた。関連する研究は多いが、ここではその一部を取り上げたい。

例えば、大野ら(2013)は現在幼稚園や保育所に就職している卒業生 131 名を対象に保育現場における音楽表現活動に関する調査を行った[4]。その結果、保育現場での童謡の活用状況を見ると、園の形態を問わず高頻度で童謡がうたわれており、特に民間保育所では回答者の 97%が「とても良く歌う」/「良く歌う」と答えた。また、園における童謡の必要性を問うと、各園では総じて「必要性を強く感じている」との回答が多かった。その一方で、現場に出てからは仕事の多忙さ故、歌やピアノ伴奏の習得が困難であることや、「童謡を知らない」/「やっていない」ことが、保育士間や保育の仕事そのものに影響してくるとも記されており、概ね 100%の卒業生が短大教育の中で童謡を習得する必要性を感じていた。

また、中野ら(2012)は、幼稚園および保育園 150 箇所を対象に保育現場で行われる音楽活動に関するアンケートを行った[1]。その結果、現場での歌唱について重視すべき要素を見ると、「音程の正確さ」、「表情の豊かさ」、「リズムの正確さ」が上位を占めている。また、現場の指導者が短大での音楽教育で

望むことを見ると、ここでも「応用力」や「表現力」、「音程やリズムの正確さ」、が挙がっており、これらの能力が重視される一方で、現場に出るまでに十分に育成されていないことが窺える。

他にも、早川ら（2012）は免許状更新講習に参加した小学校教員を対象に歌唱指導に関するアンケートを行った[10]。その結果、多くの教師が歌唱指導について問題意識や苦手意識を持っていることが明らかになった。さらに、「楽しい指導法」や「意欲を喚起する指導法」など、現場で子どもたちにどのように対応すると良いのか、現場の教員からは実践的なアドバイスを求める声が多いことも分かった。

また、安藤(2015)は「初等音楽科教育法」の講義を受ける教育学部の学生を対象に音楽経験などに関するアンケートを行った[11]。その結果から、教師として持つべき音楽の基礎力が不十分な学生がほとんどであることが明らかになった。在学中に様々な指導内容や指導法を知り、自らが授業を構築できる実践力を身につける必要性が指摘されている。

他にも、インターネット上には、指導者の歌に関する悩みや対処法に関する記事が多くある[(例：12,13)]。歌唱や合唱などに関する指導書も多数出版されており[(例：14,15)]、教育および保育現場のタイプを問わず、童謡などの歌唱指導に悩む指導者の多さが窺える。我々、教員養成を担う大学において、これらの解決は急務である。そこで、我々は現状を踏まえ、対策案を以下に考察していく。

## 3. 教員および保育士養成課程における声楽関連科目の現状

### 3.1. 各大学における声楽関連科目のシラバス分析

養成課程における声楽関連科目がどのような内容で実施されているのか、その現状を分析するため、養成学部を持つ大学のシラバスを調査した。なかでも講義の指導内容が実際の教育現場において通用するかという観点から分析した。

その結果、講義で使用する課題曲が学生には難しいのではないか、ということが問題点として明らかになった。具体的には、音楽の専門教育で取り上げるようなコールユーブンゲンやコンコーネ 50 番、イタリア歌曲などを教材として用いている大学が散見したが、これらの課題は高校以前に音楽に関する専門教育を受けていない学生にとっては理解し難いものである。なぜならば、コールユーブンゲンは無伴奏で歌う、音程を取るための練習曲であり、本来はピアノなどの平均律で調律された楽器で音を取るのではなく、自分の耳で音を取り練習するものでもある。正しい発声がある程度理解できている者が正しく使用すればそれなりの効果が得られるが、発声はおろか読譜にも慣れていない初心者の学生が時間に制約がある講義の中で使用するには難易度が高すぎる教則本である。次にコンコーネは、伴奏はあるが、響きを保ったまま母音唱で歌唱するための練習曲であり、歌詞がない。抑揚は学びやすいものの、教育現場ではあまり使用しないほど音に高低さがあるため、こちらも限られた時間の講義に使用する必要はない教則本と考える。そもそもこれらの課題として使用されている練習曲は、実際の教育および保育の現場では教材として使用されることはほとんどない。したがって、これらの課題曲を教材として用いる意図が明確ではなく、単なる練習曲として使用しているのであれば、その必要性を再考すべきではないだろうか。さらには、無伴奏で歌わせることや、歌詞がない曲に抑揚をつけるということは、音楽に対する興味を失わせる可能性すら考えられる。

このように、教員や保育士養成学部における声楽の講義内容は、音楽の基礎知識を持たない初心者の学生への配慮が欠けているのが現状である。

### 3.2. 教育および保育現場での教材用書籍の分析

本論文では、市販されている音楽教材用書籍が、子どもたちに楽曲を教えるに当たってわかりやすい内容となっているかという観点から、『やさしく弾ける保育のピアノ伴奏』（新星出版社）を取り上げて分析した。この書籍は、カラー刷りで見やすく、曲によっては初心者にも上級者にも対応した伴奏方法が提示されており、童謡等の歌詞に対する古い言い回しの意味などが掲載されていた。たとえば、文部省唱歌「かたつむり」では、歌い初めの「でんでん」について、わらべ唄として歌われる中で、子どもたちがかたつむりに貝の背から「出よ出よ」と呼びかけた言葉が訛ったものと考えられているという解説がされている[16]。またこの本は、所々に指番号が振ってあり、初心者でも指使いに迷うことのないように工夫されている。さらに本の最後にコード表も掲載されており、和音伴奏で対応することもできる。

このような教材用書籍は指導者にとって、便利で

非常に使いやすいものとなるであろう。しかしながら歌いやすさや弾きやすさを求めるあまり、メロディラインが簡易化され、原曲のメロディとは異なる曲に編曲されているものもある。童謡は作曲者と作詞者がメロディに込めた思いを表現する作品である。したがって、可能なかぎり原曲のメロディラインに忠実に歌うことが望ましい。このような点から考えると、初心者向けの教材には、原曲の良さを消してしまうほどの簡易化が施されているという短所があることも分かる。指導者を養成するための講義で使用する教材については、内容の長所と短所をよく理解したうえで、選択することが必要だろう。

3.3. 子どもへの歌唱指導に求められる能力

ここでは、子どもたちへの歌唱指導について、特に「歌う」ことをどのように指導すれば子どもたちの表現力を高めることができるのか、先行研究をまとめる。教育や保育の現場で子どもたちをどのように指導すべきかを考えることにより、教員養成学部において、学生に提供すべき要素を考察する。

鍛冶ら（2006 年）は、幼稚園の歌唱指導の際には教師が確かな音程で歌うことや、幼児の自分なりの表現を大切に育てること、幼児の声域の個人差を理解して指導していくことが重要であると述べている[17]。これは、子どもに歌を教える際には、指導者自身が正確な音程で歌うことができなければならないということである。したがって養成学部では、正確な音程で歌うことができるように学生を育成しなければならない。さらに、“自分なりの表現を大切に育てる”とあるように、曲の音楽的特徴や歌詞の意味などを理解する力や、自分の理解した気持ちを他者に伝えられるような表現力を身につけることも重要である。加えて鍛冶らは、指導法や教材の研究を引き続き行っていくことが必要であると提案している。教員を目指す学生に対し、具体的にどのような力を身につけさせるのか、より明確な目的を持って教材を選び、指導方法を検討することが重要である。

宮脇ら（2007 年）は、平成 16 年まで各都道府県主催（厚労省委託）で行われてきた「保育士試験」の実技試験の課題曲について分析し、「ピアノはバイエル」「声楽はコンコーネかコールユーブンゲン」から出題する都道府県が圧倒的に多く、逆に養成校もこれに準じた授業をするという悪循環も見られると指摘している[18]。しかしながらこのような悪循環を受け、平成 17 年度から始まった「全国統一保育士試験」（全国保育士養成協議会主催）の音楽課題が「幼児の歌唱教材の弾き歌い」のみ（2 曲）と改定された。そのため宮脇らは、平成 18 年度まではテキスト（「声楽教本：森田百合子他著、教育芸術社」）をそのまま使い、「コンコーネ」「コールユーブンゲン」「リズム打ち」を特に重視して授業を行ってきたが、平成 19 年度からは同じテキストを使いながら、副教材として、幼児の歌唱教材 69 曲を選曲し使用している。さらに、出来るだけ「実践力を身につける」という教育目標を掲げ、ソルフェージュ的内容も「歌唱教材」の中で取り上げ、コンコーネ、コールユーブンゲン等の基礎練習に時間を割かない方針に変えた。その結果、(1) こどものうた（2）あそびうた（3）歌唱（4）理論・その他、の 4 分野を並行させながら授業を構成している。教職に就くためにも、その後の実践の場でも、必要となるのはほとんどが童謡等であるため、実践力を養うには良い指導法であろう。

「歌う」ことは子どもたちにとっても比較的容易に体験できる音楽表現の一つである[19]。しかしその体験のありかた如何で、子どもたちの成長、発達に及ぼす効果は全く違うものとなることは想像に難くない。この点について小野は、もし優れた曲を、適切な指導のもとに体験することができたなら、子どもたちは、必ず「歌う」ことを楽しみ、音楽の喜びを知ることができるだろうと指摘している。また、何よりも「歌う」喜びを知り、「歌」を心の支えとして生きる事は、子どもたちの未来に力と安らぎをもたらすことに繋がると述べている。歌を含む幼少期の音楽活動が、子どもたちの脳の発達を促し、心と体の健全な成長に大きな影響を与えることは、さまざまな研究により実証されている[20]。これらの研究の結果は、多感な年齢の子どもたちがどのような音楽体験をするかによって、子どもの将来に与える影響も異なることを示唆している。言い換えるならば、子どもたちに音楽を指導する教師の指導のありかたが、子どもたちの可能性を左右するほどに重要であるということである。

さらに武田（1980 年）は、「幼児の歌唱指導は、聴唱法によってなされる為に、その導入段階の指導のあり方は、幼児に対して後々までも影響を与えて行く。つまり、歌を覚える手段が、楽譜を媒介としてではなく、範唱を聴きながらの模唱であるため、その曲の持っている音楽的な味わいはもちろんの

こと、リズムや旋律などの音楽的要素面、また発音、発声などの表現技能面のすべてが、耳に訴えた感覚的な指導でなければならない。」と述べている[21]。武田は、子どもたちの成長過程において、音楽との初期の関わりは、耳からの情報が優先されると指摘している。つまり子どもに歌唱を指導する際には、指導者がお手本となる歌を歌えなければならない。したがって、教育や保育の場面で指導をする教員には、正確な音程やリズムは言うまでも無く、言葉の意味や発音、その他様々な要素を的確に再現し、子どもたちの好奇心をかき立てるような表現力をつけた歌い方が求められる。教員の養成には、よりよいお手本となる範唱が出来るように、耳を通して子どもたちの心に響く歌唱を目指せるような講義が必要である。

以上のことから、子どもたちの歌唱は、彼らの成長過程においても心の豊かさや表現力を高めることに重要な役割を果たしていることが明らかとなった。子どもに歌を教えるためには指導者の抑揚のある範唱が不可欠である。つまり、指導者を目指す学生が学ぶ教員養成課程においては、正確な音程で歌うことや、曲調や歌詞の意味を反映した抑揚のある歌い方ができるよう、講義において学生を育成することが重要である。そのためには、講義内容や使用する教材についての検討も必要である。宮脇らによると、採用試験課題としてコンコーネやコールユーブンゲンを用いるところが少ないことから、これらの課題を養成課程の講義で使用する必要性について改めて検討すべきであろう。

### 3.4. 養成課程における声楽の指導法の提案

#### 3.4.1. 既設の講義内容に関する問題点

養成課程を有する大学において展開されている声楽関連科目には、いくつかの問題点がある。授業回数が限られており、課題曲 1 曲に割く時間が少ないため、受講する学生は、童謡等の歌詞の意味を理解し、抑揚をつけて表現するまでには至っていないのが現状である。そのため、学生が教職に就いた際に、指導する子どもたちに、歌詞の意味や音の強弱を伝えることができず、指導方法に悩む教師を生み出していることも事実である[22]。

さらに、養成課程をもつ各大学のシラバスからは、「歌う」ということに対し、初心者の学生が無理のない発声で歌えるようにすることや、どのように表現をするのか楽譜から読み解く方法を教えることが考慮されていないことが分かる。

たとえばＳ大学のシラバスでは、声楽単独の講義がなく、器楽や表現の授業で少し童謡等を扱うのみとなっている。

またＮ大学では、声楽演習Ⅰで日本歌曲を 4 曲、声楽演習Ⅱで外国歌曲を 7 曲教えている。声楽の講義とは別に弾き歌いの講義もあるので、そこで童謡等を扱っていると推察するが、そもそも教育および保育現場で日本歌曲、ましてや外国歌曲（イタリア語）などを教えることは皆無に等しい。声楽単独の講義がカリキュラムに組まれているのであれば、歌曲等よりは童謡等をより深く教えてもよいのではないだろうか。

特に、大学入学以前に音楽に関する専門教育を受けていない学生は、音楽や楽譜というものに多少なりとも苦手意識を持っていると思われる。そのような学生に、まずは歌うことへの興味を持たせるべきではないだろうか。教材としてコールユーブンゲンやコンコーネ 50 を使用すること、ならびにオペラの一部分を抜粋した重唱などを授業に取り入れている大学もあるが、初心者にそのような専門的な課題を与えることは、苦手意識を抱かせる一因になるだろう。また、教育や保育の現場における、子どもたちへの音楽教育にとっても、直接的には必要ではないだろう。さらに、音程や強弱を学ばせたいのであれば、コールユーブンゲンなどを用いずとも、直接、童謡を教材として指導してもよいのではないかと考える。

さらに、表現力をつけるための訓練、とくに感情を込めて歌うことについては、具体的な指導内容を示している大学は少ない。感情を込めて歌うことにより、歌っている人間も、またその音楽を聴いている人間も、音楽の喜びを感じ取ることができる。感情を込めた演奏をするためには、歌詞の意味やその楽曲の時代背景を理解しておく必要がある。しかしながら、現行の講義内容からは、学生自身に表現力を身につけ、子どもたちにも指導ができるような力を養うための教育内容になっていない。

なにより学生に音楽への興味を抱かせるような講義内容になっていないことが大きな問題である。興味を持たなければ練習がおろそかになり、練習をしなければ上達せず、上達しなければ自信にも繋がらない。そして自信の無いまま教育現場に立つと、口を大きく開けることや大きな声を出すことを躊躇し、結果として音程もリズムも曖昧な歌い方をし

てしまうことになる。学生たちが将来、教育現場で教える時、範唱の時点で曖昧な歌い方をしてしまうと、子どもたちも曖昧にしか歌えなくなってしまう恐れがある。教員や保育士資格の取得を目指す学生にとっての声楽の授業内容は、学生本人の実技能力にとどまらず、将来相対することになる子どもたちの多様な経験の質にも影響を及ぼすことなのである。

3.4.2. 声楽の指導法の提案

では学生に対して、どのように指導すれば、音程を正しく取らせることができるだろうか。ここでは「うれしいひなまつり（図 1）」を例に取り上げて考える。

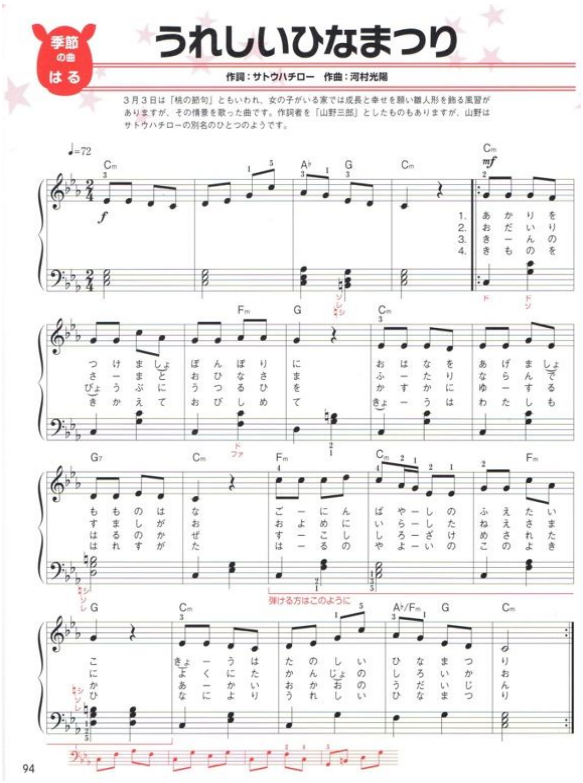


図 1　「うれしいひなまつり」
（『やさしく弾ける保育のピアノ伴奏[16]』より抜粋）

この曲は歌詞が 4 番まであるが、1 番から 4 番までの全てで同じ歌い方ができる小節はほとんどない。たとえば、歌い出しの小節については、3 番だけ「きーんの」と、一拍目裏の八分音符を延ばして歌うことになっている。一番難しいのは、短 3 度が 2 回続きながらリズムが早くなる「五人囃子の」の部分であろう。ここは歌詞が 1 番から 4 番まで、前の小節と続いた 6 文字の途中・歌詞が 4 文字・歌詞が 3 文字＋1 文字と、それぞれパターンが分かれるので、同じ音程・リズムでも歌い分ける必要がある。

したがって、やみくもに歌わせるのではなく、リズムや節回しの違いを具体的に提示し、それぞれに応じた歌い方が出来るように注意しながら講義する必要がある。小学校、幼稚園や保育所などの現場で子どもたちに範唱する際も、細かなリズムに注意して行わなければ曲本来の良さが伝わりにくくなる。

子どもたちは、適切な指導がなければ往々にしてただ大きな声で叫ぶだけの歌い方をする傾向にある。大声で叫ぶだけでは歌唱とはいえない。そのようなことを避ける意味においても、教師による最初の範唱は子どもたちにとりきわめて重要であるため、範唱を行う前に慎重に楽曲分析を行っておくことは大切なことである。

また、学生には音程を正しくとって歌える力を身につけさせなければならない。たとえば、長 3 度の音程を、曖昧に短 3 度に近い音程で歌うと、曲調が一変し明るい曲（長調）から暗い曲（短調）になってしまう。そのためには、学生が自分の声を良く聞き、音程に注意を払う訓練をしなければならない。さらに、音程を正確に歌うためには、口の開け方や息の使い方に勢いが必要となるが、自信のない学生は口を大きく開けて歌うことを躊躇してしまう傾向が強い。そのため、音程が曖昧になってしまう。指導をする教師が、リズム、音程、強弱などにも注意しつつ自信を持って歌わなければ子どもたちにも自信の無さが伝わるであろうし、子どもたちも曖昧なお手本にしたがって歌ってしまうだろう。どのような歌い方が正確な音程の確保につながるのかを具体的に示しながら、学生に自信をつけさせていくことが必要である。

さらに、歌詞の意味を理解させ、言葉のフレーズに注意し、抑揚をつけて歌えるように、歌詞を分析して歌い方を考える方法を指導することも重要である。学生たちが自ら歌詞の意味を考え、表現に工夫ができるようになれば、将来、現場で子どもたちに教えるときにも表現力豊かに歌えるよう指導できるであろう。

歌詞の分析をするためには、ブレスについても教えなければならない。歌唱にはブレスは必須のものであるが、そのブレスをとる場所を十分に検討したうえで選択しなければ、歌詞の意味が変わってしまう。学生には、子どもたちに範唱する時にはブレスの位置に十分注意し、言葉の意味が通るように歌うよう、常に意識させることも大切である。歌詞の意

味をよく考えるならば、ワンフレーズの『途中』でブレスをする（例えば「あかりを」というひとかたまりのフレーズを、「あ・かりを」のようにフレーズを分断してブレスをとってしまう）こともなくなるであろう。また学生が将来、教育や保育の現場で伴奏を行う時には、子どもたちの成長に応じた対応をし、ブレスを『待つ』こともできるようになるだろう。

くわえて、各曲に適した声で範唱することも重要である。楽しい曲なのか、悲しい曲なのか、曲想に合った声で歌うことを心がけるべきであると同時に、指導をする子どもたちにそれをわかりやすく伝える方法についても、学生とともに考えることが大切である。

ただ、「大きな声で歌いましょう」「元気に歌いましょう」と子どもたちに言うだけでは、音程を度外視して、やみくもに声を張り上げて怒鳴って歌う結果となる恐れがある。「楽しく歌いましょう」「優しく歌いましょう」「やわらかく歌いましょう」など、子どもたちの年齢や理解力に応じて言葉を換え、イメージを膨らませる表現を多用することにより曲想を形作る工夫をするならば、子どもたちの捉え方も変わるのではないだろうか。

### 3.5. 養成課程における音楽関連科目のあり方

教員免許および保育士資格の養成課程を持つ大学の多くが、音楽に関する講義コマ数を増やす余裕はないのが実状である。限られた講義時間数の中で、学生に必要な技術を身につけさせるためには、講義内容や教示方法に工夫が必要であることはいうまでもない。最優先で改善すべき点として、音楽経験の無い初心者への配慮が挙げられる。各大学の養成課程における音楽関連科目では、音楽に関する能力（経験）の有無に合わせた授業内容（クラス分けなど）になっていないことが多い。このため、一部の学生にとっては内容が難しく感じられ、音楽への興味を失ってしまっている実例もある[23]。実際、本学においても、楽譜を読むことができない学生が多く受講している。そのような学生達を、実践の場、即ち子どもたちに対して歌を教えるという状態まで育て上げることは、限られた講義回数の中では、非常に厳しいことである。このようなレベルの学生は伴奏を弾くことに必死となってしまい、歌唱が小さな声になったり、子どもたちが聴き取ることのできないような曖昧な音程や歌詞で歌っているケースが多い。このような状況を改善するためには、学生の能力に応じた対応が必要である。たとえば、楽譜を読むことに慣れていない学生には、理解の程度に応じて、楽譜の読み方を教える必要があるだろう。多くの学生は、単一譜表であれば難なく読むことができても、大譜表の楽譜になると、譜読みに尻込みしたり時間がかかったりする。そのような学生には、大譜表の中の全てのドの位置を教え、そこからいま知りたい音名を、瞬時に数えられるように指導することができる。すばやくドレミを読むことが出来ると、歌う際に音程が取りやすくなり、楽曲を覚えることも容易になる。図 2 に示したとおり、大譜表では、中心のドを基準として、中心より低いドと中心より高いドは 180° 反転した位置にある。このドの位置だけでも把握すると、楽譜を読むことにかける時間の短縮が期待できる。

図 2 大譜表におけるドの位置

すばやく楽譜を読むことができるとそれだけ自信にも繋がり、音楽への苦手意識も軽減されるのではないだろうか。

一方で、演奏の際には楽譜だけに頼らず、耳をつかって曲を覚える方法を教えることもできるだろう。初心者に対しても経験者に対しても、一つの曲を耳から覚えることによって、すなわち、何度も繰り返して曲を聴き、かつ歌わせることで、その曲をレパートリーに増やすことが可能となる。学生に曲を聴かせるときは講師が実演することだけではなく、CD や DVD などを活用しても同様の効果を得ることが期待される。さらに、音符通りに歌詞を読む「リズム読み」も、効果的な練習の方法である。リズム読みの状態で感情を込めて唱えて練習をすると、明確なリズムの再現や歌詞にメリハリをもたせることにもつながる。このように、より効率的にレパートリー曲を増やす練習方法を教えることも必要である。

また、よりよい発声を目指すことも重要である。声は、軟口蓋から鼻くうを抜けて出すとよく通り、かつ喉に負担なく発声できる。しかしながら、このような発声には各器官の運動機能をコントロールすることが不可欠であり、その方法を言葉だけで説

明をすることはきわめて困難である。なにより、発声方法についての基礎を持たない学生にとって、各器官の動かし方をイメージすることは難しく、説明に対する学生各々の受け留め方や実践の仕方が異なるため、集団での指導には充分に注意しなければならない。

くわえて、表現力を高める指導も不可欠である。曲を覚えても、ただ楽譜通りに歌うだけでは、聞き手には歌詞の意味どころか歌詞そのものですら伝わらない。感情を込めて歌えるようにするためには、歌詞の意味やその曲の時代背景を理解したうえで歌うことが重要である。また、童謡等には、現代では使わないような言い回しが含まれていることも多い。作曲された時代の背景、当時の日本の風景や伝承なども合わせて学生に考えさせることにより、将来教育現場に立ったときには、子どもたちに歌の内容を詳細に伝えることができるだろう。

教育や保育の現場ではさまざまな場面で数多くの曲を子どもたちに教えることになる。したがって、教員や保育士を目指す学生にとっては、童謡等のレパートリーが豊富であることが望ましい。しかし、現行の講義方法・内容のままであると、講義で扱える童謡の曲数は少ないのではないだろうか。自分が単に知っている曲よりも、歌いなれた曲の方が他者へ教えやすいことは当然のことである。将来教職に就き、子どもたちに歌を教える立場になる学生には、できるだけ多くの童謡を取り上げ、レパートリーを増やすことに貢献すべきだと考える。

そのためには、コールユーブンゲンやコンコーネ50、オペラの一部分を抜粋した重唱などを授業に取り入れるよりも、その時間を童謡等の指導に当てるべきではないだろうか。そして一つの曲を時間をかけて深く丁寧に分析する方法を講義に含めるべきではないだろうか。

## 4. おわりに

本論文では、小学校・幼稚園教諭の免許、および保育士資格の取得を目指す学生を対象とした、音楽（声楽）の指導方法について分析し、問題点と改善のための提案を述べてきた。即戦力となる教員や保育士を育成するためには、学生たちにより多くの童謡を教えるべきであるが、いずれの大学においても、現状のカリキュラムでは音楽関係の開講科目数が不足している。少ない講義数でいかに効率よく教えることができるかが、今後の課題になるだろう。限られた授業コマ数でより効率的に講義するための一案として、音楽関連科目間の連携を充実させることができるのではないか。たとえば、声楽とピアノの講義を展開している学部であれば、両者の講義内容に連続性をもたせ連携させると、学生の理解にも経時的な効果を期待できるであろう。

例えば、本学大阪樟蔭女子大学では、声楽の授業が1年生の前期と2年生の後期にあり、器楽（ピアノ）の授業が2年生前期と3年生後期に開講されている。このカリキュラム編成を利用し、声楽と器楽の講義で共通の曲を教材として用いることを提案したい。声楽の授業では童謡の歌唱指導を行い、器楽の授業時には同じ曲の伴奏付けや、弾き歌いの訓練をすることで、科目間に連続性を持たせることが可能となるだろう。学生にとって耳なじみのない曲であっても、授業間で連携し同一の曲を継続して用いるならば、曲への理解も深まり、演奏技術の向上も見込めるであろう。なにより、学生のレパートリーを増やすことにもつながる。

この案を実現するためには、カリキュラムの改訂や双方の指導者陣との連携も必要となるため、解決すべき問題が多いことも事実である。しかしながら、養成課程として、社会で即戦力として活躍できる人材を育成することが求められている以上、学生の能力に応じた対応を積極的に考えてゆかなければならないことは明らかである。

中央教育審議会による答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（平成 27年12月）では、「子供たちに、知識や技能の修得のみならず、これらを活用して子供たちが課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力及び主体的に学習に取り組む態度を育む指導力を身に付けることが必要である」としている[24]。これは、音楽に関しても当てはまることである。音楽を指導する際には、音楽的な知識のみならず、音楽を通して何を伝えるのか、また音楽で何が表現できるのかを、子どもたちに経験させることが重要である。

保育士や幼稚園教諭、また小学校教諭は、様々な経験の入り口にいる多感な時期の子どもたちと密接に関わる職業である。人生の初期段階で出会う多様な刺激が、その後の子どもたちの嗜好や特技などに影響することは論を俟たないが、そのなかでも音楽という刺激が子どもの発達に重要な役割を果たしていることは様々な研究が指摘していることである[20]。換言すると、保育所や幼稚園、また小学校

などにおいて、音楽をどのように指導するかによって、子どもたちの将来への可能性が左右されるということでもある。

本研究では、養成大学における声楽実技(歌唱)のあり方を考察してきた。これらの分析の結果は、養成課程を持つ大学には、子どもの教育に関わる職業を目指す学生たちが、多様な経験のスタートラインにいる子どもたちに対し、可能な限り質の高い音楽を提供できるよう指導する義務があることを示している。教育者を目指す学生が、自信をもって教育の現場に立つことができるよう、養成課程における音楽関連科目の教育の質をさらに向上させていかなければならない。

引用文献


1) 中野研也・河野久寿(2012)「保育現場で必要とされる音楽能力と幼児音楽教育との関連」仁愛女子短期大学研究紀要第 44 号.pp.71-78.

2) 柏瀬愛子・佐地多美・中村美保子・藤田まゆみ(1975)「教員養成課程をもつ大学における音楽教育の一考察(その二)」名古屋女子大学紀要 21.pp.167-173.

3) 登啓子(2012)「保育における音楽表現活動の検討」埼玉学園大学紀要(人間学部篇)第 12 号. pp.267-273.

4) 大野恵美・赤井裕美(2013)「保育現場の音楽表現活動の実態と短大教育の在り方に関する研究-保育者養成校における音楽教育-」湘北紀要第 34 号. pp.1-29.

5) 文部科学省初等中等教育局教職員課「教員の免許、採用、人事、研修等「教員免許状に関するQ&A」」.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/main13_a2.htm (2017 年 9 月 22 日閲覧).

6) 文部科学省初等中等教育局教職員課(2009)「教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則(教員免許課程認定関係条文抜粋)」.

7) 全国保育士養成協議会「保育士試験 Q&A-保育士資格を得るには」.
http://www.hoyokyo.or.jp/exam/qa/01.html (2017 年 9 月 22 日閲覧).

8) 厚生労働省「児童福祉法施行規則第 6 条の 2 第 1 項第 3 号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法(平成 22 年 7 月 13 日厚生労働省告示第 278 号改正版)」.
http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kodomo/shikaku/hoikusi-youseisisetu.files/130523.pdf (2017 年 9 月 22 日閲覧).

9) 厚生労働省(2003)「「保育の表現技術」の内容(参考資料 2)」.
http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000091439.pdf (2017 年 9 月 22 日閲覧).

10) 早川倫子・虫明眞砂子(2012)「歌唱指導における教師力の育成について-免許状更新講習の実践を通して-」岡山大学教師教育開発センター紀要第 2 号.pp.60-70.

11) 安藤江里(2015)「初等教員養成に必要とされる音楽経験に関する一考察：模擬授業の有効性」川口短大紀要 29 巻. pp.189-203.

12) 保育士転職通信「保育士だけど歌が下手で苦手な人が悩む 4 つのパターンと解決法」.http://保育士信.com/song-conquerovercome/ (2017 年 9 月 22 日閲覧).

13) 保育ひろば「保育士なのに音痴な場合の対処法とは？」.
https://hoiku-hiroba.com/special/blog/useful/資格/保育士なのに音痴な場合の対処法とは/ (2017 年 9 月 22 日閲覧).

14) 富澤裕(2010)『歌唱・合唱指導のヒント こんなときどうする？【音楽指導ブック】』.音楽之友社.

15) 飯田清美(2016)『子どもノリノリ歌唱授業 音楽＋身体表現で”歌遊び”68 選』. 学芸みらい社.

16) 新星出版社編集部(編)(2015)『やさしく弾ける保育のピアノ伴奏』新星出版社.

17) 鍛冶礼子・小林直実・紫竹英恵・宮野モモ子(2006)「幼児への歌唱指導についての一考察-自分から歌う時の声域-」千葉大学教育学部研究紀要第 54 巻.pp.63-68.

18) 宮脇長谷子・山田美穂子(2007)「保育者養成における音楽指導に関する一考察(その 2)-歌唱教材理解の現状と課題-」静岡県立大学短期大学部研究紀要(21).pp.49-55.

19) 小野文子(2006)「子どもの成長と音楽：聴くことから歌うことへ」中国学園紀要 5.pp.125-129.

20) 福井一(2010)『音楽の感動を科学する ヒトはなぜ”ホモ・カントゥス”になったのか』化学同人.

21) 武田道子(1980)「幼児の歌唱指導：導入時におけるつまづきとその治療」静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)11.pp.119-130.
22) 山﨑正彦・佐野靖(2011)「いま、若手音楽教員はどのような課題に直面しているのか？！教師歴 1～10 年程度の教員に対するアンケートから見えてくるもの」音楽教育 Vent, Vol.17. pp.26-30.
23) 豊島久美子・服部安里(2016)「教員および保育士養成学部におけるピアノ実技の自主練習に関する研究」大阪樟蔭女子大学子ども研究, Vol.7. pp.81-86.
24) 文部科学省初等中等教育局教職員課(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(中央教育審議会答申)」.

# The Teaching Methods of Vocal Skill at the Teachers College

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences, Part-time Lecturer
Anri HATTORI
Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences, Teaching Assistant
Noriko UNO
Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences
Kumiko TOYOSHIMA

**Abstract**

In the faculties for training elementary school teachers, kindergarten teachers and nursery teachers, vocal practical skills are specified as compulsory subjects. However, most of the students do not have experience receiving specialized music such as singing music and playing instruments, and also do not have basic knowledge of music including reading score.
In this paper, we examined what kind of guidance contents should be effective for students to acquire music skills without any difficulty in practical subjects for beginners of vocal music. Furthermore, we clarified what kind of points should be considered at teaching children's musical activities in education, and also analyzed the ability required as a teacher. Teaching subjects for getting teacherôs licenses and childcare professional qualifications are requested according to the student's abilities. In addition, in order to provide continuing music instruction to students, cooperation among music related subjects is indispensable. This research clarifies tasks to provide more practical music skill and applied power to students aiming for getting teacherôs license.

**Keywords:** vocal music (voice), teaching method, teacherôs license